

# 概説

RED DATA BOOK

# 鳥類

## 1. 鳥根県の鳥類相

日本鳥類目録改訂第7版には、国内で記録された種として、24目81科633種と、国内で繁殖記録のある外来種43種が報告されている。鳥根県でこれまでに報告された鳥類は、明治24年に渡辺盈作が動物学雑誌に「鳥根県下鳥類目録第一回報告」として62種を発表して以来、多くの報告があるが、まとまったものは比較的限られる。和名や分類が現在と異なっているものもあり、一概に比較はできないが、1970年の「鳥根県に分布する鳥類」（鳥根県発行）では21目48科224種（亜種11種を含む）、1978年の「鳥根県鳥類目録」（根岸啓二監修、鳥根県発行）では18目55科286種（亜種を含めば298種）、1983年の「鳥根県の鳥類」（内田 映著、鳥根野鳥の会発行）では297種（亜種を含めば305種）、1984年の「しまねの野鳥」（佐藤仁志ほか著、山陰中央新報社発行）では323種・亜種、1994年の「しまねの野鳥（II）」（濱田義治ほか著、山陰中央新報社発行）では338種・亜種、1997年の「しまねの鳥」（日本野鳥の会鳥根県支部編、鳥根県発行）では358種・亜種が報告されている。さらに、近年確認された種を含めれば、本県で確認された種・亜種は400種余りに及ぶ。

このように、本県に生息する鳥類相については、次第にその概要が明らかになってきており、これまでに本県で確認された鳥類は、国内で記録されている鳥類の約65%に及び、豊富な鳥類相が見られる地域といえよう。

鳥類相の特徴は、地理的条件や自然環境と不可分の関係にある。本県の北西部は日本海に面し、日本海に浮かぶ隠岐諸島もある。また、南部には標高1,000m級の中国山地が連なり、脊梁部を形成している。中国山地は標高がさほど高くなく、古くからたたたら製鉄に伴う薪炭生産が盛んに行われてきたため、多くの地域はアカマツやコナラを中心とする二次林が優占し、自然林はごくわずかしかなかった。また、中海・宍道湖といった国内で5番目と7番目に大きい湖も抱えている。これらの周辺には、出雲平野や安来平野などの広大な水田地帯も広がっており、一帯は水鳥類の絶好の生息域となっている。さらに、朝鮮半島を含む中国大陸と比較的近い位置

にあるなど、自然環境や地理的条件には、他県にみられないようないくつかの特徴があり、それらを反映した鳥類相がみられる。具体的には、マガンやコハクチョウなど冬鳥の日本列島における南限の越冬地となっていることや、大陸系の珍しい鳥類の渡来が多いこと、日本海を直接横断して渡来・渡去する渡り鳥が多いこと、宍道湖・中海が国内最大級の水鳥の渡来地になっていること、カンムリウミスズメなどの稀少な鳥類が隠岐諸島などの無人島で繁殖していることなどが上げられる。

## 2. 掲載種の選定に当たって

このたびの改定作業に当たっては、改訂しまねレッドデータブック（2004年、鳥根県）に掲載されている種をベースに、カテゴリー区分のもとに見直しや追加を行った。また、前回の選定と同様に、環境省のレッドデータブック掲載種にはこだわらず、本県における生息状況や絶滅の危険性といった独自の観点から選定作業を行った。特に、留鳥や夏鳥については、繁殖状況を重要視した。なお、国内に渡来することがまれな種や、迷鳥的な種については、その取り扱いが難しいところがある。本県では、環境省のレッドデータブックに掲載されている種の多くが記録されているが、迷行的な種については取り上げないこととし、ほぼ恒常的に渡来する種に絞って選定を行った。

亜種の取り扱いについては、亜種の識別が可能で亜種ごとの評価が異なる場合には、亜種を種と同様の扱いとした。

絶滅した鳥類としては、トキのみを取り上げた。トキのほかにもコウノトリ、タンチョウ、キタタキなど、過去において繁殖していたり恒常的に渡来していた可能性が高く、絶滅種として取り上げてもよいと思われる種もあったが、確かな生息や繁殖の記録がないため、このたびは取り上げなかった。

分類や学名等については、日本鳥類目録改訂第7版（日本鳥学会2012）を採用した。

（佐藤仁志）